

# ディストピアの反逆児

Charlotte Haldane の *Man's World* と Aldous Huxley の *Brave New World*

小澤 央

## はじめに

Charlotte Haldane の *Man's World* (1926) は Aldous Huxley の *Brave New World* (1932) に影響を与えたユートピア文学として知られるが、両作品の関係が具体的に検討されることは稀である。本発表は *Man's World* と *Brave New World* における設定、キャラクター、ストーリーを比較し、その共通点と相違点について、両作家の伝記的事実や同時代の文化的・社会的文脈との関係で考察する。

## 両作品の比較

*Man's World* は、近未来における白人の国家連合を舞台とする。世界最終戦争のあと、科学者たちが主導して管理国家を建設し、優生学政策を実施してきた。女性は生殖能力に応じて、出産と育児に従事する専業「母親」と、生殖能力を奪われて「不妊化」されたグループに大別される。後者の社会的評価は低く、事務職に従事する“Neuters”と、芸術家や芸能人として活動する“Entertainers”から成る。男性は知的能力に応じて、科学者、行政官、プロレタリア大衆に分類される。主人公は政府高官の十代の息子 Christopher と娘 Nicolette である。兄は同性愛者の音楽家で神秘主義者である一方、妹は母親になるか、不妊化された女性として生きていくかの選択を迫られる年頃で、マザーフードに興味を抱きつつ抵抗も感じている。二人は性別役割分担を含めてこの社会の在り方に不満であり、仲間とともに反体制運動を企てる。その核心は、Nicolette が国家の指示ではなく個人の意思で妊娠するという点にあった。しかし Nicolette が体制側の科学者を愛してしまい、運動から離脱したため、計画は頓挫。Christopher は失意のうちに飛行機で空高く舞い上がり、酸欠状態となって墜落死する。

他方、*Brave New World* は、科学技術が支配する 26 世紀の全体主義国家を舞台とする。世界最終戦争のあと、世界の指導者たちが安定第一の世界国家を築いた。アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、イプシロンという厳格な階級ごとに知能や肉体がランク付けされ、条件付けという一種の洗脳が幼少期から施されている。全市民は培養瓶で製造され下層階級は大量生産されるとともに、女性の一部は生殖能力を奪われ不妊化される。物語の前半は、人工孵化・条件付けセンターの反体制的心理学者 Bernard を中心に展開する。彼と同僚 Lenina は、旧来の生活習慣や文化が維持された「野蛮人居留地」を訪れた際、John という白人青年に出会う。John はロンドン出身の母 Linda と暮らしており、彼の父は人工孵化・条件付けセンターの所長であった。John はアメリカ先住民の宗教と Shakespeare 作品などの伝統的文化から影響を受けている。Bernard の誘いで John は Linda とともにロンドンを訪れるが、高度に発達したテクノロジーや大衆文化、そこに安住する人々に失望する。母の死後、自由を訴えて反乱を試みるものの、失敗。世界統制官との議論も物別れに終わり、John は孤独を求めサリーの荒野に赴くが、マスコミや群衆から逃れられず、灯台で縊死する。

いくつかの点で二つの作品はよく似ている。どちらの世界も理想郷とはいえないが、かといって完全なディストピアでもない——少なくとも大多数の住民は幸福に暮らしている——両義的なユートピアである点。男性科学者が支配する全体主義国家であり、国策として生殖を最重視している点。反面、家族は形骸化している、あるいは不在である点。厳格な階級制による分業体制である点。女性が生殖能力の有無により分類される点。社会構造が男性・白人中心主義である点。

特に重要なのは、どちらの物語にも反抗的な青年が主人公として登場する点だ。二人とも自由、情熱、芸術、宗教といった伝統的な人間性や文化を重んじる一方、テクノロジーや合理主義、管理体制といった、この未来を特徴づける文明のあり方に批判的である。彼らは抵抗運動を企て失敗し自殺する点でも共通する。興味深いことに、二人ともセクシュアリティ的にあいまいな面を持つ。*Man's World* の世界では、妊娠中の母親がエクササイズを行うことで、国家により指定された性別の子供を出産しなければならない。Christopher の母は男児を産むべきところ、女兒を望んでいたために必要なエクササイズを怠り、結果的に息子を同性愛者にしてしまったとされる。一方で、Nicolette は Christopher にとって恋人であると同時に母親のような存在でもあり、妹への強い愛着ゆえに兄は女性を愛せないようにも見える。妹に本当の恋人ができ、二人の擬似的な恋人・母子関係が破綻した結果、兄は自死を選んだのかもしれない。*Brave New World* の John も Linda に対して強い愛情を抱いており、それゆえ Lenina と深い関係になれない。ほかの女性を愛することが母への裏切りであると感じてしまうのだ。異性愛主義が絶対化される世界では、セクシュアリティ的にあいまいであることや、異性愛以外のセクシュアリティは容認されない。セクシュアリティは政治性を帯び、国家に対する反逆にもなりうるのだ。そして生殖や育児が国家の管理すべきものとされ家族制度が形骸化した世界では、母子関係もまた政治性を持ち、国家に対する反逆となり

うるのである。

*Man's World* と *Brave New World* はどちらも国家管理の生殖制度を描いているが、それを受け止める女性の視点は前者にのみ存在する。*Man's World* には、その制度に賛成、反対の立場だけでなく、中間の立場も含めた多様な女性が登場する。Nicolette は当初、母親になるのを躊躇う自分は異常ではないかと不安に感じ、彼女の母は娘の想いを尊重したい一方、社会的体面も気になって悩む。Nicolette のおばは、自らは母親にならない選択をしながらもマザーフッドの意義を認め、それを補助する仕事に就いている。このように多様な女性の微妙な心境が描かれるものの、最終的に Nicolette が母親として生きることを選んで物語は閉じるため、異性愛や母性といった伝統的価値観に収束するようにも読める。これに対し、*Brave New World* は *Man's World* より遠い未来を舞台としていることもあり、安定性をより重視した制度を採用している。母親や家庭といった私的存在を介さず、国家が一元的に生殖や育児を直接管理するのである。そのため母親となる女性、母親とならない女性の苦悩は基本的に描かれない。例外は Linda であり、彼女は親子や家族を恥ずべきものと条件付けされているがゆえ息子との関係に悩む。John は彼女の恥であるとともに生きがいでもあるのだ。ここから、母親という経験が女性にとって大事なものになりうると読み取れるものの、*Man's World* ほど明確なメッセージではない。

### 共通点・相違点の背景

*Man's World* や *Brave New World* は、女性や生殖をめぐる同時代の言説のなかに位置づけられる。戦間期には、参政権などの女性の権利を拡張し、避妊の技術を普及して家族の規模をコントロールしようとする革新的な流れとともに、戦後の融和的ムードゆえに急進的な運動を好まず、家庭の平和を重視する保守的な流れもあった。このような状況は、英国や世界の将来を論じた近未来叢書“*To-day and To-morrow*” (1923-1931) からも確認できる。思想的・政治的な立場の違いにもかかわらず、マザーフッドが危機的状況にあるという認識や母性を美德と捉える姿勢は多くの執筆者に共有されている。Haldane や Huxley にとって、この叢書は何人もの知り合いが寄稿する馴染み深いものであった。そもそも、生殖を合理的に管理する制度という二人の作品に共通する設定自体が、“*To-day and To-morrow*”の第一巻である、J・B・S・Haldane——Charlotte の夫であり Huxley の友人——の *Daedalus* (1924) から着想を得たものなのだ。

*Man's World* と *Brave New World* における相違点は、作者の科学に対する関係や関心の違いを表している。*Man's World* が描く生殖やマザーフッドに対するさまざまな態度の女性、そして主人公が母親業の重要性に気づくというストーリー展開は、Haldane の科学との関わり方を反映している。彼女は経済的事情で高等教育を受けられず、独学で勉強してジャーナリズムの世界に入り、科学者と関わるようになった。やがて科学言説を用いて女性の地位向上を図ろうとする。経済的困窮のため育児に苦労した経験から、国家が母親をもっと支援すべきだと考えるようにもなった。マザーフッドの重視が女性の地位向上に繋がると信じたのである。エッセイ *Motherhood and Its Enemies* (1927) や、彼女が編集者を務めた *Woman Today* では、生物学や心理学の言説を用いてマザーフッドを力説する論調が目立つ。さらに、*Man's World* にはミソジニーともとれる設定や発言が出てくる。Nicolette のパートナーは女性の知的発達に男性より一世紀遅れていると豪語する。そもそもこの作品世界は男性優位の体制であるものの、それを十分に批判する物語とはなっていない。ここには現実の男性科学者からの影響も指摘できるだろう。J・B・S・Haldane も含め、女性が客観性、中立性を欠くために科学的思考に不向きであるとする偏見は、当時の科学界に根強く見られた。*Man's World* における、女性への不当に厳しい記述は、作者が女性に肩入れせず、あえて「中立的」「客観的」であろうとした結果、生み出された矛盾かもしれない。一方で *Brave New World* における、あまりに現実離れした生殖、育児、家族のあり方は、これらの現存する形が決して唯一ではなく改変可能であることを示している。この小説のなかで生殖などの制度は、女性がどう感じるかというより、社会的にどういうメリットがあるかという観点から捉えられており、作者の関心が女性よりも人類全体の運命にあったことがわかる。Huxley も弱視ゆえに医者になるのを諦めた、つまり科学の世界に正式に入れなかった作家であるが、Charlotte Haldane が抱えていた出身階級やジェンダーゆえの葛藤はなかったのである。

### おわりに

科学者が支配し生殖を管理する全体主義的未来という設定や、反抗的主人公の存在、そして彼が自殺へと向かうストーリー展開において、Huxley は Haldane から多大な影響を受けていたといえる。他方、*Man's World* が提示する出産や育児と向き合う多様な女性像は、*Brave New World* からは殆ど抜け落ちており、ここには両作家の科学に対する関係や関心の違いが反映されている。二作の両義的ユートピア小説を合わせ読むことで、戦間期の人々が生殖や育児、家族の可能性や理想像をどのように捉えていたか、そして私達自身が今後どのように考えていったらよいかといった点についてヒントを得られるかもしれない。